

幼児用ジーンズの動作適応性

東京学芸大 鳴海多恵子 ○荒川 純 大妻女大人間生科研 布施谷節子
静岡大 大村知子

【目的】 若者のファッションとしてわが国に導入されたジーンズは、今や広い年齢層、用途に利用されるようになった。幼児の衣服としても利用され、歩行が不安定な年少児にも着用が見受けられる。幼児の衣服の要素としては着脱の容易さ、動作を妨げない活動性等が重要であるが、ジーンズは素材の硬さが幼児の行動を阻害するものとも考えられる。本研究では幼児のジーンズ着用時の動作特性の解析、および衣服と身体とのズレおよび衣服圧測定からジーンズによる身体の拘束について検討を行い、並びに動作解析の方法確立のための基礎資料を得ることを目的とした。

【方法】 被験者は3才男児4名とし、「座る」動作における未着衣時の姿勢とジーンズ着用時の姿勢を画像処理により数値化し、その変化を検討した。また、ウエストベルトの上下の移動量を計測するとともに、膝部を想定したモデルによる衣服圧測定を行った。試験着はスリムジーンズと同型のニットズボンとした。

【結果】 幼児は未着衣時およびニットズボン着用時は、幼児特有の「しゃがむ」姿勢をとりやすいが、ジーンズ着用時は膝を前方につきだした姿勢となり、十分に膝が曲げきれないことが明かとなった。膝部の衣服圧は屈伸時にジーンズはニットズボンに比べ約1.5倍となることが示された。ベルトの移動量はジーンズよりニットズボンのほうが多く個人差があったが、ジーンズは個人差がほとんどみられず、ウエストにおいても拘束の大きいことが明かとなった。動作解析において、安定した動作が得られにくい幼児には画像処理は極めて有効であったが、さらに動作特性に対応する実験設定を検討する必要性が明かとなった。